

戸田美佳子著

『越境する障害者——アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』

明石書店、2015年、4,000円＋税、224頁

佐野文哉

本書は、2013年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出された博士論文を加筆・修正して出版された、アフリカ・カメルーン共和国に暮らす「身体障害者」についての民族誌である。著者は2006年から2011年にかけて断続的に行った2年半におよぶフィールドワークをもとに本書を書きあげた。

長期でかつ緻密なフィールドワークにもとづいて執筆された本書は、さまざまな側面から読むことができる。たとえば、カメルーンの森林地帯に暮らす狩猟採集民と農耕民の社会関係を、ときにその社会的な境界を越境しながら日々の生活を営む「障害者」の姿から描き出す本書は、アフリカ地域の民族間関係にかんする研究としても示唆に富んでいる。しかし本稿では、本書の主題である「障害」にかんする側面から本書をひもといていきたい。

本書は、序章と終章を含む計6つの章で構成されている。また第1章から第4章の末尾にはそれぞれ短いコラムが挿入され、終章の後にはカメルーンにかんするさまざまな情報が記載された補遺がつけくわえられている。以下、コラムと補遺を除く各章について順を追ってみていく。

序章 問題の所在

- 1 障害における医療モデルと社会モデル
- 2 アフリカにおける「隠された障害者」像
- 3 障害者のカテゴリー化とその「息苦しさ」
- 4 分析の対象——生業とケア

第1章 カメルーン熱帯林に暮らす人びと——調査地の概説

- 1 「森の世界（ピグミー）」と「村の世界（農耕民）」
- 2 東部州における社会環境の変容
- 3 狩猟採集民バカと農耕民の混住村——調査村モンディンディム村
- 4 本書の主人公たち

◆コラム① ある昼下がりの過ごし方

- 第2章 障害のフォークモデルと西欧的障害観の移入
 - 1 病気と障害
 - 2 アフリカ諸国における西欧的な障害者の枠組みと政策の移入
 - 3 障害者と慈善活動——カメルーン東部州における取り組みとその影響
 - 4 私たちの障害観とカメルーン農村に暮らす人びとの障害観
 - ◆コラム② カメルーンの車いす事情
- 第3章 障害者と家族——居住形態と婚姻関係
 - 1 狩猟採集民バカと農耕民の居住形態と婚姻関係
 - 2 障害者の婚姻の選択と同居親族
 - ◆コラム③ 「マダム」と呼ばれること
- 第4章 熱帯林に暮らす障害者の営み——生業活動と生計
 - 1 農耕民と狩猟採集民バカの生業
 - 2 農村に暮らす身体障害者の生計手段——広域調査の結果より
 - 3 農耕民・狩猟採集民の障害者の生業活動——参与観察の結果より
 - 4 日常実践におけるケア——生業とその担い手
 - 5 インター・エスニックな生業活動と日常に内在化したケア
 - ◆コラム④ 病院に行った狩猟採集民ジェマ
——ジェマと村人、そして調査者の経験
- 終章 結論
 - 1 アフリカに「ケア」はあるか？ ——「ケア」を再考する
 - 2 障害者の越境
 - 3 障害と平等——障害の「息苦しさ」の正体
 - 4 共同性と対等性が織りなす社会へ
 - 補遺1 カメルーン共和国の基礎データ（二〇一二年時点）
 - 補遺2 カメルーン共和国の障害者政策
 - 補遺3 カメルーン共和国の行政システム
 - 補遺4 カメルーン東南部における農耕民の分布
 - 補遺5 カメルーン共和国および東部州ブンバ・ンゴコ県における社会・経済的变化と障害者のライフコース

序章では本書における問題の所在が示される。

冒頭ではまず、当事者運動を背景に発展してきた障害学で提唱された障害の「医療モデル」と「社会モデル」が紹介される。障害の「医療モデル」とは、「個人の心身の機能的な損傷すなわちインペアメント（impairment）が「障害」を生み出すとみなす考え方（14頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記載する）。一方、障害の「社会モデル」は、「問題は個人ではなく、社会・環境にあり、変わるべきは社会にある」（14）と主張し、「障害者に何かを「できなくさせる」、その社会過程を明らかに」しようとする（15）。障害学では障害の「社会モデル」が強調され、そこにおいて障害は個人から社会

の問題へと変換される。しかし著者は、障害学では「障害者の社会的排除を自明視しすぎたために、排除が発動されるメカニズム（ディスアビリティの発生過程）をとらえることができなくなってきた」と批判する（16）。そのうえで著者は「障害（ディスアビリティ）を作る「社会」が異なるとき、私たちはどれだけそこに暮らす障害（インペアメント）を抱える人びとの「障害（ディスアビリティ）」を理解できるのだろうか」と問いかける（16）。

つぎにマスメディア等で語られてきたアフリカの障害者をめぐる言説が検討される。マスメディアはこれまで、アフリカでは貧しさゆえに障害者を放置するという「ケアしないアフリカ」のイメージや、「呪い」や「罪」と結びつけられた障害者が外部から隠蔽されコミュニティから放置されているとする「隠された障害者」像を提示してきた。それに対して民族集団内の相互扶助を強調して核家族の枠をこえたさまざまな援助が行われていると主張する立場もあるが、著者は、カメルーン東南部の農村社会に暮らす障害者の日常はそのどちらにもあてはまらないと具体的な事例をあげて指摘する。そこで示唆されるのは「先進国における「ケア」とは異なるコンテキスト」（19）で実施されるケアのあり方である。

著者が序章の最後に検討するのは、日本で障害者について語るときの「息苦しさ」である。カメルーンで感じなかった障害を扱う「息苦しさ」を日本で感じるのは、障害が社会的問題となった今でも「障害をなお、ある種の「カテゴリー」として見る見方が残っている」からであり、「差別しまいとする差別」が働いているからであると著者は述べる（21）。

以上の検討から導かれる本書の目的は、これまで語られてきたイメージとは異なる「本来のアフリカの障害者の姿」（26）を提示することを通して、「障害者のカテゴリー化に抗する方向性」（21）を見出すことである。

つづく第1章では、調査地の概要がまとめられる。

本書の舞台となるアフリカ・カメルーン東南部にはピグミー系狩猟採集民バカとバントゥー系言語を話す農耕民が隣接して暮らしている。両者はながいあいだ「アンビバレント（両義的）な感情を抱きながら、それぞれの生活や文化において、なくてはならない相互依存的な関係を築いてきた」（34）。19世紀になり、カメルーンがヨーロッパによるアフリカ支配体制に組み込まれるようになると、それまで森林キャンプを移動して生活していたバカや森林内の集落に居住していた農耕民は、道路沿いの集落で強制労働に従事することが求められるようになる。その後、1920年代から1930年代にかけてカカオ栽培が導入され、さらに1970年代になり伐採会社の参入により現金の流通が一般化したことをきっかけに、農耕民とバカの関係はカカオ栽培における「雇用—被雇用」という現金を介する関係となった。

このような「ポスト狩猟採集民社会」に暮らす「障害者」が本書の主人公である。以下の章では、幼少期に両下肢に障害があらわれた農耕民男性（ジュドネ）、ポリオで両下肢が委縮した農耕民女性（モニーク）、成人期以降に両手の指と両ひざに硬直があらわれた狩猟採集民男性（アヴァンダ）、同じく成人期以降に視覚障害があらわれた狩猟採集民男性（ジェマ）などといった人物を中心に議論が展開されていく。

第2章では、調査地における「病気」や「障害」にかんする分類とその経験、そして調査地に浸透しつつある「障害者」という枠組みをめぐる状況が語られる。

調査地には、「脚が自由に動かない人びと」や「身体的障害をもつ人びと、奇形、湾曲した体の人びと」を示す独自のことばがある。前者はバカ語で「ワ・クマ (*wà kúma*)」、後者はバカ語で「ワ・フォア (*wà phoà*)」、カコ語で「モ・ジェンティ (*mo jémti*)」という。「ただしこのような「動かない」や「目が見えない」といった状態を示す「ワ・フォア」や「ワ・クマ」という現地語は、日常の会話のなかで彼らを総称する言葉としては使用されていない」(63-64)。

その一方で「カメルーンでは、フランス統治時代にフランスを手本とする社会福祉が始まり、独立後、国連の後押しのもと、障害者の権利擁護という国際的潮流のなかで「障害者 (*les personnes handicapées*)」という枠組みが浸透していった」(66)。こうした「障害者」という新たな枠組みはキリスト教の布教にもなう慈善活動などを通して、調査地であるカメルーン東南部の村にも普及していった。

そうした慈善活動のなかで「障害者」は「援助を受けるべき対象」として規定される。とくに「狩猟採集民バカの障害者」は、農耕民から搾取を受ける「マイノリティ (狩猟採集民) のなかのマイノリティ (障害者)」として位置づけられ、ミッションナリーの活動を中心にバカだけを対象とした慈善活動が展開されてきた。そうした支援のあり方は「支援の対象となるバカの障害者」と「それ以外の障害者」という新たな枠組みを作り出している」(70)。

第3章では、調査地に暮らす障害者の社会関係が、婚姻関係を中心にまとめられる。

調査地において、行政の単位のうえでは狩猟採集民バカと農耕民は一つの村に混在して暮らしている。しかしエスニック集団ごとの集落の区分は明確で、農耕民の多くはバカの集落に立ち入ることを好まず、バカも畑仕事の手伝いなどを除くと農耕民の集落に長く居座ることはない。また両者の社会的な関係は婚姻関係において顕著にあらわれ、農耕民同士の間では通婚は頻繁にみられるが、バカと農耕民の間では通婚は少なく、バカの女性が農耕民の男性に嫁ぐ「上昇婚」しかみられない。

それでは調査地に暮らす障害者はどうであろうか。本書でとりあげるバカの男性障害者は他のバカのようにバカの女性と結婚していた。そのうちの一人である集落の長老アヴァンダは結婚後に患った病により両下肢の硬直と手のマヒを抱えている。しかし彼は集落にいたバカや子どもたちに囲まれて生活しており、食事は集落の娘が運び、身体を洗うときには子どもが手伝う。ただしそれは障害者のためのケアではなく、家長であり長老であるアヴァンダに対するケアである。

一方、幼少期から障害をもつ農耕民の障害者は、バカの障害者とは異なる婚姻関係を築いていた。たとえば下肢に障害をもつ農耕民男性ジュドネはバカの女性 (第一夫人) と結婚していた。彼が一般的に通婚の忌避がみられるバカの女性を第一夫人としたことについて、著者は、治療と通学のために長らく村を離れており、帰村した後にバカの集落の隣に住むようになった当時のジュドネには、彼の生活を一緒に支える人が必要であり、そうした「生活を手伝い・協力しあう最善の女性が、現在の第一夫人であるバカの妻だった」の

ではないかと分析している (91-92)。

こうした事例からいえることは、調査地においては「障害をもつという現状以上に、誰と誰のあいだに生まれ、どのような社会関係のなかで育ったかという事実が、社会構成を築くうえで大きな要因となっている」ということである (92)。

第4章では、調査地に暮らす障害者の生業活動および日常生活におけるケアのあり方について述べられる。

現金経済の浸透した現在の調査地において、カカオ栽培は重要な現金獲得源である。近年ではバカの男性がカカオ畑を所有することも珍しくないが、農耕民のそれと比べると面積が小さく維持も容易でないため、バカの多くは農耕民の畑仕事を手伝うことで農作物と現金を獲得し、そのかわりで狩猟採集を行う。一方、農耕民はバカを雇用して主食となる作物や換金作物であるカカオを栽培する。農耕民とバカの生業活動の内容には大きな違いはないが、両者のあいだには社会的な境界と上下関係が存在しており、またカカオ畑の規模にもとづく経済的な格差ゆえに両者は雇用一被雇用の関係にある。

こうした農耕民とバカの経済的・社会的に不均衡な関係は、調査地に暮らす障害者が生業活動を維持していくうえで重要な役割をはたしている。たとえば下半身にマヒを抱える農耕民男性ジュドネは仕立てによる現金収入でバカを雇用してカカオ畑を切り盛りしていた。このジュドネとバカとの関係は農作業の場だけに限定されず、水汲みや車いすの整備など、日常生活のさまざまな場面に及んでいた。しかし彼らの関係は決して長期的で安定したものではなく、主体的に生計を営む者 (ジュドネ) とのあいだで交わされた雇用一被雇用関係であった。

では定住集落と森のキャンプを往復して生活する狩猟採集民の障害者の場合はどうか。目が不自由なジェマは、他のバカが森での狩猟・採集活動を行っているあいだ、農耕民の手伝いをしながら農耕民の集落で過ごして食料や酒、タバコなどを獲得していた。それらの多くはその場で消費されたり他のバカに贈与されたりするものであり、安定した生計維持活動とはいいがたい。しかし親族集団であるバカとの関係に着目すると、農耕民とバカの雇用一被雇用関係を利用して生活を営むことは、バカの社会に自らの世話をめぐる緊張を生まないための方策でもあることがわかる。またときにジェマは本人の選択のもと周囲の人の手助けを得て森のキャンプに出向き余暇を過ごす。そこではケアの関係を軸に生活が決まるのではなく、どのように生活するかが決まってはじめてケアの関係が構築される。

調査地に暮らす障害者のこうしたインター・エスニックな関係は、この地域の生業が親族関係や地域集団、場所と深く関係しており、対面的な関係性のなかで行われているということに加えて、彼らが「非障害者に比べて周囲とより濃い関係性を必要とする存在である」(139) がゆえに可能になっている。「機能的な障害 (損傷) が他の社会へと向かう越境的動きを彼らに与えている」(139) のである。

終章では、これまでの論述をふまえて総合的な考察が行われる。

最初に考察されるのは、アフリカの障害者をめぐる「ケアしないアフリカ」そして「隠された障害者」というイメージである。第4章で論述したように、アフリカでは、西欧や

日本におけるケアとは異なり、ケアする者／される者の関係が固定的でないケア、いいかえれば「その場限りの一過性の関係におけるケア」(155)が実践されていた。そこにおいてケアは、障害者がどのような日常生活を営むかという生活実践に立脚して、対面する他者との双方向的な関係のなかでそのつど生成している。

また調査地に暮らす障害者は、たとえ互いの状況は等しくなくとも、「一人前」の「狩猟採集民」、「農耕民」として目の前の相手に対しており、そのなかでインター・エスニックな関係を築いていた。「彼らにとって、障害は差異・区別として否定しようもなく存在していたが、そのことはかえって、コミュニティの内部において、障害者をめぐるインター・エスニックなつながりを創出する原動力となっていた」(161)のである。

つぎに著者は、障害をめぐる「息苦しき」の原因について考察する。著者はアンリ＝ジャック・スティケルの研究〔Stiker 1982〕をひきながら、身体的な「差異」がヨーロッパ社会で否定されるようになった経緯をあとづけて、そのなかで「健常から逸脱した障害者」を社会へと「統合」することが望ましいとする「平等」を希求するイデオロギーが登場してきた結果、逆に障害者が周縁化され差別されるようになったと論じる。そのうえで「平等」を追い求める現代の障害者運動を批判し、「集団というカテゴリーで定義づけられた平等では、同時に不平等を生み出している可能性がある」(165)と指摘する。

これ以降、著者は、全体論的な「平等」と局所的で対面的な「対等」との違いをもとに、菅原和孝の提示した「共同性」と「対等性」のはなし〔菅原 1998〕へと議論を展開して、「狩猟採集民」や「農耕民」といった社会的カテゴリーにもとづく「共同性」への配慮とともに成立する「対等」な関係のなかで生きる狩猟採集民と農耕民の共在のあり方を指摘する。そこに見出せるのは、民族集団ごとの共同性から生じる非対称性を基盤としながらも局時的な対等性を内在する「障害者の生存を保障する社会性」(187)である。

以上が本書の大まかな内容である。アフリカの「障害者」をとりまく状況の検討を通して、「障害」をめぐる「息苦しき」について考察する本書は、貴重なデータやさまざまな示唆に富んでいる。

ただし本書の結論部分の考察は少々混乱しているといわざるをえない。「障害」をめぐる身体的な「差異」の否定とそのなかで登場してきた「平等」をよしとするイデオロギーの暴力性を指摘したスティケルの議論から、狩猟採集民—農耕民社会における民族的な「共同性」と対面的な「対等性」のはなしへと展開する部分には、もともとの議論の射程を誤った論理の飛躍がみられる。

なおこの「差異」に対する着目は、本書の目的であった「障害者のカテゴリー化に抗する方向性」へとつながる重要な指摘である一方、その「差異」に対する視点にこそ、本書の問題点が集約されていると評者は考える。そこで以下では、障害をめぐる「差異」という視点から、本書について評者なりに論じてみたい。

本書の問題点は、障害をめぐる「差異」の体系の多様性が等閑視されているところにある。著者は冒頭で障害の「社会モデル」をとりあげ、「障害」の社会構築性について論じているが、その際「ディスアビリティ」と「インペアメント」を峻別し、前者のみ社会的構築物として扱い、後者は生物学的所与としての「普遍的な差異（逸脱）」とみなしてい

るように思われる。しかし星加良司が指摘するように、「社会モデル」の提唱者であるマイケル・オリバーの議論では、「医学的なインペアメント理解が偶発的な歴史の産物であることは初めから議論の前提となつて」いた [星加 2013: 27]。

この点については人類学的な障害研究においても指摘されている。スーザン・レイノルズ・ホワイトとベネディクト・イングスタッドは、Fatima Halantine と Gunvor Berge の研究 [Halantine & Berge 1990] を引きながらつぎのように述べる。北アフリカ・サハラ地方のイスラム遊牧民であるトゥアレグ (Tuareg) のあいだでは、聾、過度のそばかす、出べそ、注意散漫、しまりのないあるいは小さな尻などが正常な役割の遂行能力の妨げとなる個人的特質であると考えられている。ここにあげられたもののうち、たとえば「出べそ」や「しまりのないあるいは小さな尻」などといった生物学的—身体的特徴は、西洋生物医学に慣れ親しんだ私たちの感覚からすれば「インペアメント」とはみなされないだろう。ここからいえることはすなわち、どのような生物学的—身体的特徴が「差異」や「逸脱」として有標化されるかは、当該の社会における「なにを正常とみなすか」にかんする観念との関係からしか明らかにならないということである [ホワイト & イングスタッド 2006: 20–21]。「障害」の社会構築性を論じる際には、調査者が有する「インペアメント」信仰も相対化されなければならない。

さて上述の星加は、「仮にインペアメントが生物学的事実として見なされてきたとしても、そのことによって特に問題が生じないならば、つまり障害学や障害者運動の焦点化したイシューにとってインペアメントの社会性に特に重要性がないといえる限りにおいて、それはモデルの使用法として合理的である」 [星加 2013: 28] というプラグマティックな見解を提示しているが、はたして本書における「社会モデル」の使用法は「合理的」であるといえるのだろうか。評者はこの点について否定的である。むしろ本書の目的と照らし合わせて考えると、そこでは重要な問いが覆い隠されてしまっているように思われる。

本書の目的は「障害者のカテゴリー化に抗する方向性」を提示することであった。上記の「障害」の社会構築性の議論をふまえれば、たとえば「身体障害者」という用語は、あくまで便宜的なカテゴリーであり、「われわれ」としての「解釈用語」でしかないことは明らかである。そもそも著者自身も本書の第2章で調査地における独自の用語（「ワ・クマ」「ワ・フォア」）について記述し、調査地ではそうした用語が本書に登場する人びとを総称するものとして用いられていないというきわめて重要な情報を提示している。

それにもかかわらず、「身体障害」という「インペアメント」にもとづく「差異」を基準に、彼らを「アフリカの障害者」としてひとくくりにして議論を展開するという点に評者は疑問を感じる。それ自体が著者の批判する「障害者のカテゴリー化」でないとするのなら、いったいどのような積極的な意義があったのか。いいかえれば、著者が「アフリカ（カメルーン）の障害者」と呼ぶ本書に登場する人びとはいかなる意味で「障害者」だったのか。これは本書の主張の根幹にかかわる問いでありながら、この点について明確にふれられている個所はない。

とはいえ本書の価値がすべて失われてしまうかといえば、決してそうではないということとは最後につけくわえておかねばなるまい。本書が非西欧社会におけるいわゆる「障害

者」にかんする貴重な記述やデータを含む緻密な民族誌であることは確かである。また本稿では省略したが、各章のあいだに挿入されるコラムや末尾の補遺も読みごたえがある。身体的特徴や民族的境界など、さまざまな差異を抱えながら、その差異のなかで生きる人びとの姿を描きだす本書は、日本や西欧社会を含むさまざまな地域の「障害者」を対象とする研究者にとってはもちろんのこと、開発援助や社会福祉などの領域にかかわる人びとにとっても示唆に富んだものである。本書が幅広い人びとに読まれることを期待したい。

<参考文献>

- 菅原和孝 1998 『会話の人類学——ブッシュマンの生活世界(Ⅱ)』京都大学学術出版会。
- 星加良司 2013 「第1章 社会モデルの分岐点——実践性は諸刃の剣？」川越敏司・川島聡・星加良司編『障害学のリハビリテーション——障害の社会モデルその射程と限界』生活書院、pp.20-40。
- ホワイト, スーザン・レイノルズ & ベネディクト・イングスタッド 2006 「第1章 障害と文化——展望」ベネディクト・イングスタッド & スーザン・レイノルズ・ホワイト編『障害と文化——非欧米世界からの障害観の問いなおし』中村満紀男・山口恵里子監訳、明石書店、pp.15-56。
- Halantine, Fatima & Gunvor Berge 1990 Perceptions of Disabilities among Kel Tamasheq of Northern Mali. In F. J. Bruun & Benedict Ingstad eds. *Disability in a Cross-cultural Perspective* (Working Paper No. 4). Oslo: Department of Social Anthropology, University of Oslo.
- Stiker, Henri-Jacques 1982 (1999) *Corps Infirmes et Sociétés*. Paris: Aubier Montaigne. (*A History of Disability*. translated by William Sayers. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1999).